

第18号

川越初雁会



今年度の活動について

コロナ禍の渦中での活動を模索しながら



川越初雁会会長 岩堀 弘明

マスク姿で挨拶する会長

令和二年は令和元年年末より、中国に発生源を持つコロナウイルスの発生で、川越初雁会の活動が、大幅に制限されました。

役員会と明治神宮の杜を散策した集まりと、会員のゴルフコンペのみの活動となりました。

さて、今年の活動もコロナウイルスのワクチンの摂取次第になると思うのですが、現在決まっている事業は、春の講演会を山梨大学教授田中敦氏をお招きして、観光産業について講演を三月二〇日(土)午後三時から川越高校図書館二階セミナー室において開催します。

先行きの見えない中での活動になると思うのですが、かつてのように、賑やかに全員が揃う総会が開けることを期待して、状況に応じた活動を続けたいと思っています。

川越初雁会の総会開催見送り

総会議事を郵送にて承認

コロナウイルスの蔓延の恐れで



同窓会館会議室での役員会で郵送で議決する事を承認

コロナウイルスの蔓延によって、総会は開催を断念しました。そのため、昨年七月一八日川越高校同窓会館において、拡大役員会を開催し、令和元年度の総会議案を郵送で送付し賛否を問うことを役員会で承認しました。

令和二年八月一日に発送し八月末日をもって締め切り、返信の葉書において賛成多数をもって、令和元年度の事業、決算、並びに令和二年度の事業計画、役員、予算が承認されました。

また、役員会で春の講演会の講師を承認して頂き講演依頼をする事が決定されました。

春の講演会講師紹介

山梨大学教授 田中 敦氏

小樽生まれ、川越育ち。川越高校三十四回卒。

横浜国立大学卒業後、JT Bに就職、業務を経験した後に、社内ベンチャー制度で自ら出資し(株)JT B ベネフィットを創業。その後、山梨大学生命環境学部、地域社会システム学科に観光政策科学特別コースに着任。大学では観光産業における経営戦略、イノベーション、グローバル観光教育等を研究されています。



明治神宮の森 秋の散策会

久しぶりの初雁会の行事を楽しむ

原 宗康 (高四十七回)



鳥居の前で全員揃って記念写真

で事業の再開を模索してきました。そこで再開の足掛かりとして、感染予防のために内容は縮小したうえで、秋季散策会を実施することといたしました。

今年の秋季散策会は、都会の真ん中に一〇〇年ほど前に作られた、明治神宮の森を散策いたしました。

一〇月三日土曜日、副都心線経由にて川越を出発し、明治神宮前駅に到着、原宿口に集合した参加者は十七名でした。当日のご案内役は東農大講師で、造園がご専門の(株)東京ランドスケープ研究所会長 小林治人先生にお願いいたしました。小林先生は明治神宮の杜を設計された造園学の大家、上原啓二博士の教え子としても知られており、この度当初雁会、(高十二回)の山中さんにご紹介いただきました。

この神宮の森は、明治四十五年明治天皇が崩御さ

れ、祀るための神社創健の機運が生まれました。その場所が代々木と決まったものの、そこは相当な荒地地でした。そこでこの荒地地に森を造成することになりました。

その造成を主導したのが「日本公園の父」とされる本多静六博士、先の上原敬二博士、本郷高徳博士の三人です。

本多氏らが考えた神宮の森は、「自然の森」であり、百年後には人口の森が自然の森と見紛うほどになり、しかも永遠に存続する森を作ることでした。その考えは「天

然更新」と呼ばれ、人為的な植伐をせず、その自然の森を永遠に維持することを理想としており、大阪堺にある仁徳天皇陵に学んだとされています。

しかし、造成にあたって、この考えに噛みついたのが時の首相大隈重信だったそうで、大隈は伊勢神宮のよ



圧倒された本殿前の夫婦楠



遊歩道を散策中の参加者

うな杉の並木のような雄大で荘厳な景観を望んで対立したそうです。その後科学的に説得して、本多博士らは自らの考えで造成にあたることとなりました。

実際の森づくりを支えたのは、全国からの大量の献木で、その数は十万本にも

及んだそうです。それに加えて延べ十一万人にも及ぶ青年団の勤労奉仕がありました。当時は第一次世界大戦後の好景気により、労働力不足がその背景にあったようです。

そのようなことを知った上で、明治神宮の森を初めて訪れました。そこには都心にいることを忘れる位の「自然な森」

が広がっていました。「管理された森」であれば、きれいに低木などが伐採され、見栄えの良い森ができるのでしようが、そこは本多博士が提唱した「自然更新」の実践により百年たっ

た今も、鬱蒼とした自然な森が見事に存続しています。常緑樹と落葉樹、広葉樹と針葉樹のバランスも考えて混植した理想的な人工都市林として、世界に誇りうるものというのも頷けます。林道を歩きながら、隣の明治神宮の雰囲気と相まって堂々としたその自然な数々の巨木の佇まいに、とても神秘的なものを感じました。それが人工的なものである

とは、言われないと分からない程の見事な森です。また、神殿の前の夫婦楠の見事さに圧倒されました。当初に、どれだけの樹齢の楠を植林したか分かりませんが、成長の早い樹木との説明でしたが、今、見事に枝を伸ばし、堂々と屹立していました。土地にあった植樹の成果だと造園者の慧眼に感服しました。川越高校の楠も、土地にあった樹木ということ



散策コース - - - - 明治神宮の森の範囲

選定されたのかもしれないとの思いをよせました。また、楠の根の給水のために、御影石の目地を全て取り払ったという話も、さぞかし大変だったろうという思いと、その効果に感じました。さらに、歩いた距離を明治神宮の地図上で見て、改めて規模の大きさを知らされました。

一行は途中明治神宮の参拝をし、その当時の様子に思いを巡らせながら、ゆっくり森を散策しました。感染防止のため楽しみにしていた懇親会は中止としたため、二時間ほどの散策会となりましたが、なんとか無事に遂行できたこと、久しぶりに皆さんと顔を合わせることができ、事務局としても大変嬉しく思いました。

一日も早いコロナ禍が収束し、またゆっくり顔を合わせて懇親の場が設けられることを、願うばかりです。

雁の記

川越散策日記

荒牧 澄多

(高二十七回)

初雁公園のラジオ塔



初雁球場に建つラジオ塔

正式には「公衆用ラジオ聴取施設」または「常設公衆受信塔」と称され、公園などにラジオと拡声装置をセットして、多くの

今回は、初雁公園野球場内にあるラジオ塔のお話です。

一塁側から入った右側にある灯籠を、覚えていらっしゃいますか。

私も、なんでこんなところに灯籠が、と思っていました。

しばらく前に「ラジオ塔ではないか」とのお話をいただき、郷土史に詳しい方に伺ったところ、ラジオ年鑑に載っているものではないかと教えていただきました。

ラジオ塔、これは何。

方々ラジオ放送を聞けるようにしました。一九三〇(昭和五)年に大阪、天王寺公園に設置されたものが最初で、一九三二(昭和七)年度に、受信契約数百万件突破記念として、全国五〇か所に設置する計画が立てられました。ラジオ塔は、あくまで公共の場で一般の方に放送を聞かせるための施設で、今私たちが考えるような、防災無線などを目的としたものではなかったようです。全国に四五〇カ所以上設置され、今でも四〇

カ所程度残っているのとこのことです。

川越のラジオ塔に関する記述は、昭和十六年十二月に日本放送協会から発行された「昭和十七年 ラジオ年鑑」に記載されています。

それによると、昭和十五年に「川越市グランド」に設置されました。その少し前に浦和の「調宮公園(現調公園)」にも設置されています。「鉄道主要線構内公衆用ラジオ」は「浦和、熊谷、大宮」に設置されました。

なお、ウイキペディアによると東松山市の町営運動場にもあったことになっています。



火袋部分コード用の穴

初雁球場のものは、灯籠に模して言えば、火袋部分にコードを差し入れたと思

われる丸い管が二本あります。また、柱には、スイッチが取り付いていた跡でしようか。イギリス積み風



柱にあるスイッチの穴

にデザインされた面に、小さな穴が三つ並んでいます。

目測ですが、高さは九十寸(約二・七米)、一番広いのは笠の部分で幅五十寸(約一・五米)ほどです。本来は、地覆に相当する台座があったはずですがありません。スタンド造成時に盛り土をして埋めてしまったのではないでしょうか。一度掘ってみたいですね。

なお、前橋市の「前橋市中央児童遊園(るなばあく)ラジオ塔(一九三三年)」、明石市の「中崎遊園地ラジオ塔(一九三一年)」は、国の登録有形文化財になって

います。前橋市のラジオ塔文化遺産オンラインより



今回のラジオ塔も前回の国旗掲揚塔も、我が国の歴史の一端を担った生き証人として文化的価値は十分にあると思われれます。この二基を併せて、登録有形文化財などにして守り伝えることにより、多くの人々の注目を集めることでしよう。市が発表した初雁公園の整備にあたり、この二基が移築されて保存されるといいますね。

余談ですが、アニメ「おおきく振りかぶって」のあるシーンの背景に、このラジオ塔が描かれているようです。

参考 日本ラジオ博物館 ホームページ、国会図書館 デジタルコレクションほか

排球部の思い出

石川 武 (高二十四)

排球部も他の運動部と同様に旧制中学時代から続く長い歴史がある。それを回顧するのはとてもできないし、残念なことに資料も少ない。ここでは諸先輩の方々が築かれた歴史の上での一ページにスポットを当ててみることにする。団塊の世代の方々には共感される部分もあるかもしれない。



1966年埼玉国体にラインズマンとして参加した川越高校排球部員

東京オリンピックが契機

東京オリンピックピックは東洋の魔女の金メダル、男子は意外と知られていないが銅メダルであった。バレーボールの人気は一気に火が付いた時代である。その影には連綿と努力されて来た歴史があるのだが。

その一年後、昭和四十年に入学。当時はまだ前時代的なシゴキのような練習の毎日であった。二十名ほど入部したが夏になると一人二人、そして一年過ぎるころには半数以下に減った。チームを組むころには六名にも満たなかった。

春秋の地区、県大会とあったがほかに川越高、熊谷高交歓会があった。いわゆる熊交戦である。それは運動部、文化部全体が一年おきにバスを連ねて相手校に行き、試合、研究発表するという行事であった。後輩に聞くと数年後にはなくなっていた。当時はすべて

の面でライバル校であった。

夏合宿の思い出

夏合宿での宿泊所は校内の古色蒼然とした講堂であった。柔道部の畳(?)を借りての宿泊である。合宿費を捻出するため現役生が近隣の先輩方の御自宅を訪問、寄付を募らせて頂いた。

今では考えられないことと思うがバレーボールは外でやるものであった。日に焼け泥だらけの毎日である。男子校故のパンカラさも充分に残っていた。唯一の救い?楽しみは川女の排球部員の方々が交代で食事の支度をしてくださったことである。

第二十二回埼玉国体

昭和四十一年に二年生になると保健体育の新人教師として萩原秀雄先生が着任された。教員チームの主要メンバーである先生の情熱が一気に注がれた。部員にとってはあまりにも技術の

差が大き過ぎた。それゆえに軋轢が生じてしまう。互いに悶々とした時が流れた。時間が解決してくれた。

その渦中でも大学の一部リーグ戦の観戦、都内の強豪校との練習試合など刺激的な経験をさせて頂いた。そんな中、今まで点在していた運動部の部室が一部集約され、いわゆるハーモニカ長屋となって現存する。

昭和四十二年、埼玉国体が開催され川越市がバレーボールの会場となった。部員達はラインズマンとして参加し、その後日本のヒーローになる選手たちに会うことができた。もちろん埼玉教員チームは優勝し天皇杯、皇后杯を獲得する時代である。

後輩達の活躍

萩原先生が着任されてから三年目にして関東大会出場にまで漕ぎ着ける。その後、春高バレー、国体出場と県内の上位常連校として

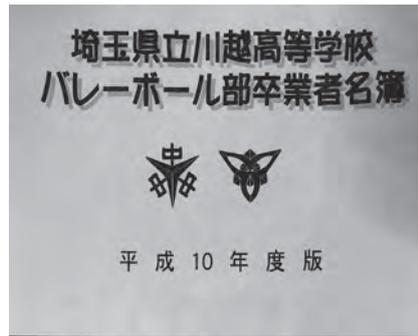
の地歩を固めていった。折りしも全日本チームもメキシコオリンピックでは銀、そしてミュンヘンでは念願の金メダルを獲得して黄金期を迎える。今は、ブームが鎮静化して久しいが捲土重来を期待したい。

OB会の発足

考えてみると二十数年 前までは明確に組織化されたOB会はなかったよ うだ。それはある日の一 本の電話から始まった。 ひと回り以上下のOBか らである。萩原先生から の紹介のことだった。



念願のOB会発足の名簿と総会資料



その後仕事場にちよ く ちよく遊びに来るようになつた。その中での話であ る。「OB会を組織しよう」と。分かる限りの後輩に連絡し集まってもらった。名簿、規約、ホームページの作成、後輩達の縦横無尽の 関係プレーは素晴らしかつ

た。そして何回もの会合を 重ね、ついに一九九九年に 百十一名のOBが川越プリ ンスホテルに参集した。川 高のリベラルアーツレベル の高さを痛感した次第であ る。

毎年繰り返される一月三 日の定例会（現役生との練 習試合、その後の懇親会） 七月末の暑気払いの会があ る。いつも数十名のOBが 集い有意義な時間を共有し ている。そして現役生への 援助も続けられるようにも なつた。だが数年に一度の 総会もこのコロナ禍で延期 となる。既成概念が瓦解し ていく昨今であるが、我々 は川越高校という所で青春 時代を共有してきた仲間（ど の部活に属していたとして も）である。互いの絆で何 としてでもこの難局を乗り 越えてもらいたい。

最後に私としては排球部 という時代掛かった言い方 が好きである。

第十八回ゴルフコンペ

梶田 進一（高二十回）



川越カントリーで行われた32名参加のコンペ

優勝は最年長の山田恒雄 様、準優勝は島田邦生様三 位は梶田和久様。ベストグ ロスは島田様、梶田様二名 様が（三十九）という素晴 らしいスコアを出しました。

「次回のコンペは皆で顔 を合わせ、パーティをやり たいね」という言葉があり ました。コロナが収まり思 い切りクラブを振り回せる ことを願っています。

編集後記

今回も会員が集まるこ とができない状況の中で、 メールを駆使しての編集 で、なんとか発行する事が できました。

事務局からのお願い

年会費二千円未納の方は、 お早めに納入をお願いいた します。

発行人

会長 岩堀 弘明

事務局 川越市六軒町一三三

題字 吉沢翠亭(義和)

印刷 (株)櫻井印刷所